

平成十七年一月一日発行 第十五巻第一号 通巻第一六三号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

岡井省二創刊

平成17年1月号



雀蛤となる

高橋将夫

神々の集まつてゐる花野かな
竜田姫狐日和に來たりけり
内側に反るもよかろう芋莖の葉
鉄棒の着地きまりてさやけしや

醉芙蓉大黒天のころがりし
一斉に向きを変へたる鯛かな
通草採り二つ三つは懐に
地獄網干してありけり菊日和
冬仕度あわてることはなかりけり
水郷をめぐり雀も蛤に

十三回大会句（近江八幡）

銀河よ舟の戻りて近江かな

省二かな
延広禎一

宇宙独楽をぶんぶん廻はす省二かな
繭玉やけんびし菱どんと机の上
春三日阿闍梨餅ある日和かな
硯池早や春の気配ぞ宝相華
後朝やえびらの源太梅かざす
半鐘鳴る右脳左脳や月朧
めがね拭くたびに散りゆくさくらかな
音の出ぬ綾の鼓や花槐
夏鯨えん浮ぶの塵を佛ひたる
猩々の掌にある早桃かな

劍菱川灘生一本

特別作品

渦潮は遊戯ゆげのるつぼよ阿波をどり
月光や空に書かるる飛白体
新絹の赤ふんどしとおかめ笹
月夜茸かますの耳の尖りたる
ふくべ提げ黄泉よもつ比良ひらさ坂か越えやうかい
芋水車胎蔵界の宴かな
こつて牛霧きらへる方に喝を挙ぐ
つはぶきの花と大日和讃かな
雪嶺や醍醐食しをる笑尉
シリウスの真下榑火の守らるる

槐安集

市場基巳

赤き日に染まらじと鳴く蚯蚓かな
泳ぎゆくすつぽん秋は過ぎつつあり
毒茸けふ小学校に何かある
いとどの死はらはら山の通り雨
コスモスに何ゆえとなく昼の酒

水野恒彦

山の芋掘つて戻りし省浄忌
秋遍路人より遠き山を見て
色のなき風に六波羅密寺かな
ねむるまで読む愚管抄天の川
わたつみの冷ことさらに鶴渡る

石脇みはる

刀豆の二つ乾びし容かな
胡麻殻を束ね雁仰ぎけり
月夜茸熊野古道の石畳
霜月や唐獅子舞の只中に
六甲にぬしみせばやの花の昼

竹内悦子

白萩や觥きざらで洗ふ足袋のうら
鹿の角切りしばらくは出来ぬ恋
騎馬戦はとんがり帽子秋茜
佃煮のよく売れ釣瓶落しかな
弘法の山のこだまや楓の木



木下野生

雁や西空に雲ひとかけら
芦焼く火間近をひとり通りけり
赤とんぼこの村にこの子がひとり
仰山に並んで韓国産茸
放課後の学校鳥の渡りけり

延広禎一

邯鄲の魂やどりたる笛座かな
さ牡鹿の眼に寂光のありにけり
占^{しめじ}地の胞子飛び立つスパンコール
芋茎剥く乙の面^テやいがいがどん
舌の無き骸^{むくろ}もの言ふ野分かな

中島陽華

秋の虹思はぬ難波みやげかな
悪太郎の面とつたりけらつつき
子が育ち涙法師の後の月
秋夕焼ボレロ最高潮なりき
さやけしや乾き初めたる麩饅頭

栗栖恵通子

水底にムンクのおぶく今朝の秋
秋日和ダチヨウの偽卵転がれり
華宵忌や胸のあたりの化粧紙
ソロモンの指環きつくて流れ星
片瀬波鹿鳴く声となりにけり

加藤みき

秋声や大漁旗の船どまり
青石に銀杏落葉の輪舞かな
つやつやの石の面や神の留守
たくさんの鳥居をくぐり紅葉山
姉羽鶴に恃みたきこと一つある

雨村敏子

秋水に溶けたる秋のいろを見し
山の日が山楂子の実にみづうみに
舟にみて耳のあとさき鳩のこゑ
山の影葦の穂綿のま際まで
枯蘆の形となりて近江かな

大島翠木

封切らぬ赤きワインや八雲の忌
風神に朱さ授かり烏瓜
月高しここの添水の聞えけり
小心の五感ひろげて小春かな
蓮の実の飛ばざる穴も枯れに入る



槐市集

久保東海司

蟲の原明けてこゑごゑ細くなり
吾に憑く蝶や花野を逃れきて
流鏑馬の的の射抜かれ露の散る
鮎走る見えて流れの早かりし
一山を寺となしたる露しぐれ

黒田咲子

山鳩が番で浅沙二番咲き
刀豆の日に呆けたる青さかな
水槽の網の袋の尾花蛸
雨痛し島天辺を鵲高音
笹むらの石露点点と黄を飛ばす

近藤きくえ

秋惜む川鶉ときどき顔を出す
手こぎ舟のうらうらと揺れ鴉
納棺の花の中なる藤袴
日照雨あり色重ねつつこぼれ萩
梟に大いなる気を貰ひたる

近藤公子

蝸の声のぶつかる喉仏
芋虫に仏さがしてをりにけり
ひび割れし池に入りたる枯蓮
ひもすがら穴掘つてをり秋の風
野路菊や風が遊んでゐるばかり



槐集

高橋将夫選

采女舞ひつるべ落しとなりにけり

枚方

近藤きくえ

白川の砂にまぎれし棗の実

木の実独楽いま鉢合せせしところ

うばたまや西方に川流れぬて

最澄の山の風なり烏瓜

透きとほる五大ききちばったかな

岡崎

近藤 喜子

天帝のにこにこにこと馬肥ゆる

たましひの一連なりひとつらに雁渡る

荔枝裂け皆の向きたる方を向く

秋惜しむエミール・ガレの瓶の青

鶉高音どこから鉄入れやうか

香川

黒田 咲子

自転車をもたせかけたる十三夜

幻月や肉桂の葉の泣いてゐる

すは天狗風ひよどりに火が付いた

三井寺ごみむし夜更しの渋茶

翁面のとうとうたらり鴉

枚方

中野 京子

烏瓜悼さす風の日和なり

日も月も東山から衣被

霧はれて樹雨きざめを受ける掌

さしてきし秋日如來の不目かな

住吉に新酒くみたり芭蕉の碑

枚方

谷村 幸子

庵治石に秋の夕日のまぶしかり

赤藟蕪近江に食して秋惜しむ

猪垣の中に昼餉の男かな

よろけ縞の着物を吊す秋日和

秋祭終りからだのほてりかな

京都

竹中 一花

花野出てネオンの川となりしかな

土蜘蛛の糸を拾ひし秋の壬生

狂言の無言の仕草水引草

ライオンの髪に秋風強きかな

銀河往来 高橋将夫

「実相観入」と「内観」

◇「実相観入」という言葉がある。斎藤茂吉の歌論で、「子規以来の写生論を一步進めたもので、皮相の写生に止まらず、実相（真実の姿）に徹底するをもって短歌写生道の要諦とするもの」だそうである。

「内観」という言葉がある。仏教的には、「精神を集中して心中に自己の本性や真理を観察すること。またその修行」で、心理学的には、「自分の意識体験を自ら観察すること。内省」ということである。

「精神の風景」は、後者の概念に近いと思う。眼前の景を前提としないからである。ただ、「自分の意識体験を自ら観察する」という場合、その「意識体験」は単に目に写っただけの景ではない。その意味で、「実相観入」は「内観」においてもあてはまるといえる。

こうして、自己と向き合い、自己と対話する中から湧いてきたもの、収斂されたもの、具象化されたものが俳句作品ということである。その行為は、本人が意識しているといまいと、「存在、本質、真理」追求の過程に他ならないと思う。

次に「自ら観察する」という点について考えてみよう。この観察には技術的な修練があることは勿論である。しかし、もっと大事なことは、自らが進化していくことだと思ふ。極端に言えば、自らが変わらなければ、俳句は変わらない。俳句が変わったということは、自らが変わったということである。

◇「槐集」観照

白川の砂にまぎれし棗の実 近藤きくえ
白い花崗岩が風化した白川砂は敷砂として珍重される。そこに棗の実があるという。この簡潔さが精神の位相の深さ。

たましひの なりに雁渡る 近藤 喜子
雁が渡ってくる：はるかな旅もまもなく終ろうとしている。魂の連なりとはまさに心眼。

すは天狗風ひよどりに火が付いた 黒田 咲子
天狗の団扇の風に煽られて、ただでさえ煩いヒヨドリが大騒ぎになるさまが目につかぶ。「天狗風」に「火が付いた」が照應して面白い。

日も 月も 東山から 衣被 中野 京子
「月は東に、日は西に」を逆手にとって、東山に絞っている。さらに、大きな景が「衣被」に収斂していく。

赤蒟蒻 近江に食して秋惜しむ 谷村 幸子
秋惜しむに赤蒟蒻をもつてするあたり、ついに芭蕉を越えましたかな。

秋祭終りからだのほてりかな 竹中 一花
威勢のよい夏祭に対して、秋祭には豊かな美りと静けさがある。そして、体のほてりが…。(以下略)